
エキセンへの5円切符～始まりの物語～

ムーンデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキセンへの5円切符〜始まりの物語〜

【Nコード】

N8813J

【作者名】

ムーンデイ

【あらすじ】

超能力者のみが集まる”風変わりな”又は”異常な”裏の駅。ただの人間の少年は不思議な切符と銀髪の青年と出会い、新しい世界へと足を踏み入れた。弱い今の自分を変える為に。強くなり憧れの先輩に振り向いて貰う為に。

少年「どうやってたら超能力を使えるのですか師匠!」、青年「先ずは駅で切符を買ってください。今回は練習なので1000円まで、わかりましたか?」、少年「え?」、少女「切符!超能力。コレ常識」、少年「うエ?」。今、此处に始まる次世代鉄道物語!!

プロローグ

今から数えると約10年前。

和歌山市の西部に位置する海。その上に一つの島、つまり人工島が造られた。

面積は和歌山市より一回り大きく。

ここはとある少年曰く「都会3割で田舎7割とまさに理想の樂園」だのコト。

まあ、海と森と自然に囲まれて確かに綺麗で空気も美味しい。加えて生活に必要なモノは大都市並に入手できる。

それだと環境云々の問題はどうか？ その点に関しては完璧と言える。

この街で作られた又は外部から支給されるモノは全て自然という環境に優しいのだ。

更に朝と夜は島はとても静かで物音が意外なほど耳に届く。

そんな人にも自然にも優しい、造られた島の名は、

——歌空島。
うたそらじま

桜散る裏庭で二人の男女が向き合っていた。

男は何故か緊張気味で顔が赤く。「ダイジョーブだよリンゴくん」と呟いていた。

女は獲物を見つけた獣が如く口元が吊り上がっていた。

沈黙という名の空気が漂う。

それを壊したのは男の想い、

「貴方が好きです！ 俺と付き合ってください！」

「却下」

即答。しかも、謝罪の言葉もなし。

「良く聞きなさい、少年A——」

名前さえ呼んでくれない。

「君みたいな地味で目立たぬ子が、何の努力という名のアプローチなどをせずに告白して成功する。何て夢の中でも有り得ないコトなのよ？」

次々に心に刺さる言葉の槍。

泣きそうなんだけど……。

「だから強くなりなさい。一度ならず失敗と成功を繰り返して生まれ変わるの。その時、もし君の気持ちが今と変わらぬなら再び私のところに来て」

もしかして気を使ってくれてるの？

言い方は遠まわし過ぎるけど、きっとそうなんだ。

やっぱり先輩は良い人だな。

「でもね人は一人だと何も出来ない生物なの。だから特別に私から試練を与えてあげる」

黒いトーンがのしかかった。

「君の告白失敗談を学校中にバラす」

「ええ？ な、何ですか？ 試練とどう関係が？」

「安心して少年B。私なら僅か一日で学校中に流すことなんて朝飯

前。何故なら、告白の一部始終はバツチリと録音済みよ」

スルー？ スルーですか？ しかもAからBに変わってる。
何故かグッジョブと親指を立てる先輩。ええ、何がグッジョブなの？

ヤバイ。この人はヤバイ。何でこんな人を好きになったんだと後悔する。

あ、せめて録音したモノだけでも。
ってアレ？ 体が動かない。声も出ない。
どうなってるんだ？

「さあ、決めたとなれば行動は早い方がいいわ。善は急げよ」

そう言つと体を180度回転してこの場から立ち去るように歩く。
ああ！ 待つてよ！ 先輩！ それだけは止めてくださあああ！

――刹那――

「忘れるな」

声が頭に響くと同時に地面に大きな亀裂が入った。
ギシギシと音を立てて、少年の足元が崩れる。

（え？ う……そ？）

そのまま少年は崩れていく足場に飲み込まれていく。

「絶対に忘れるな……条一」
（何をおおおおお）

浮遊感を感じながら少年は、暗黒の底へと落ちていく……。

第01話：5円で始める超能力

——告白拒否という恐ろしい夢を見たその放課後。

桜の並木が花びらを降らせつつある、ロマンチックな光景を背景にして。

少年は坂道を下りながら、一人の少女の姿を頭の中で何回もリピート再生していた。

友達に教えられた”とある噂”を考えながら。

（超能力者が集まる駅……か。これは挽回チャンスだぞ俺っ！）

その少女とは少年が通う高校の一つ年上の先輩の事だ。

先ほど学校で、廊下のだ真ん中で転んでしまい。

”偶然”にも、前を歩いていた憧れの先輩を巻き込んでしまった。しかも傍からの視点で見れば、所謂”押し倒した”状態になり。

まあ、それだけならまだマシだったかも知れない。

右手が変な位置に来なければ。

伝わってくる柔らかな感触。それは手に余る大きいモノ。

そう。条一の右手が”憧れの先輩の胸を鷲掴みにしていた”。

（あれ？ 意外にも大きい……。って、えっ？ 俺の手が、先輩の胸を……ハッ！）

俺は何をやっているんだーと急いで立ち上がり、頭を思いっきり下げる。

これはマズイ。かなりマズイぞ。何回も何回も謝罪の言葉と意を示すため頭を下げる。

けれど、先輩は一部始終ずっと無言のまま少年を睨んでいた。

(……絶対に嫌われたよー。あんなのが俺と先輩の初対面とか嫌だけど)

数十回も頭を下げ漸く彼女の口から「いいよ気にはしない」と言われた時は、ホッとしたのは言うまでもない。

(……でもアレ。よぉ〜っく思い出してみると先輩の顔……ゼンゼン笑ってない！ という新事実。内心じゃ絶対に……ブルブルっ考えたくもありません)

その後、自分の教室に戻ったときに「超能力の駅」云々の話を友達達がしていた。

何か面白そうだったので、というか何か楽しい話でも聞かないと挫けそうだったので、詳しく聞いてみた。

・元々は発売機で5円玉を突っ込んで切符を買うと不思議な切符が手に入るみたいな感じだったらしい。
・それが大きくなり、その不思議な切符は実は無制限乗り放題切符とか。

・実はそれらはカモフラージュで、本当は変な駅に行くためのモノ。
・その変な駅こそが超能力者のみが集まる駅だと言う事。

まあ、友達曰く「所詮は噂だけだね」。確かにそうだ。
そんなモノが実際に存在するならば今ごろ世界中が大パニックだろう。

さすがにそんな噂を信じるのは今時の小学生でもそうはいない。
現代に生きる普通の少年が高校生にもなっさすがにそんな噂など、

「だから超能力の駅を見つけて先輩を招待するんだ！」

信じていました。ここに一人。

「きつひつひつひ、ダイジョーブだよリンゴくん。絶対にある！」

少年の名は泉条一。^{いすみじょういち}ピカピカの（高校）一年生です♪

- - - - -

切符を買う前に、適当なお店で100円玉を20枚の5円玉に替えて貰い。

今、条一は券売機の前にいる。

何のために？

それは勿論、噂と戦うために決まっている。

「よ、よし始めますか」

ゴクリと唾を飲み、財布から5円玉を1枚取り出す。

5円玉をゆつくりと硬貨投入口に近づけてから、中に突っ込ませる。

——そして”とある事”に条一は気づいた。

それは。入れた後にどうするか、だ。

顔を上げて路線図を見る。

しかし、超能力者が集まる駅らしい記述すらない（当たり前）。

「ま、まさか騙されたのか？」

誰も騙してはおりません。最初から噂と仰ってました。

「友を信じた俺がバカだった……」

周りの視線を気にも止めずに大げさに地面に崩れる。

「確かにさ普通に考えたら有り得もしないよ。超能力の駅なんて全く信じてなかったし期待もしなかったよ」

ゆっくりと立ち上がり、その場から離れながら呟く、

「たださ俺ひとりの力じゃ好きな人を振り向かせることも出来ないから……」

誰もがする小さな悩み。けれど少年にとっては大きな事だ。気になる人。好きな人に嫌われる。

望みもしなかった展開を少年は先ほど体験したから。だから探した。超能力という絶対的な力を。

——トン、と肩を叩かれた。

後ろを向くと、白いトップハットと白いコートを来た銀髪の外国人が立っていた。

ハテ、どうしたモノか。誰にでも胸を張って言えるが、条一は英語が苦手なのだ。

会話など自分の名前を言うくらいしか出来ない。

中学の英語教師にも「お前は永遠に鎖国してろ。外国の人に失礼だ」と判印も貰っている。

故に目の前にいる何処の国かも分からない人に何か言われたら……ブルブルっ想像したくない。

なのに何で俺に俺はムリいー英語は話せないよぉーっとうるたえていたら、

「少年」

外国の人は条一がいた券売機を指差し、

「切符を取るの忘れてますよ」

「……」

日本語ペラペラでした。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。以後気を付けてください」

若手緊張しながらも言い、切符を取りに戻る。

やっぱり日本語バツシグーだな。自分より上手ではないのか。というか俺ってバカだな。家に帰るのには結局は電車に乗らないと行けないの——っとそのままで考えて思った。

（あれ？ 切符……買ったけ？ いや、5円玉しか入れてないような……）

見ると、確かに切符が出ていた。

他とは明らかに違う色の切符が。

（何これ……？）

裏表どちらも黒一色で塗りつぶされていた。何も書かれてないただ黒い切符。

というか切符と呼べるのかさえ怪しい。
けれどそこでとある事が頭を遮った。

——超能力者が集まる駅

もしやこれでは無いのかと。試してみる価値はある。
改札口に切符を入れる……まるで他と同じ普通の切符ですとも言いたげ問題なく通れた。

「や……った……。もしかしてもしかしたら。ホンモノ？」

口元が気持ち悪いくらいにニヤリと歪ませいるのが自分でも分かった。

でも仕方ないじゃん。だって……だって……本当だったんだもん！
条一は心の中で友達に謝る。

ごめんダチよ。騙されたあーとか言っで。お前らは良いやつだ。
君たちの事は絶対に忘れない。さらばー。

電車が目の前に止まり。ここでフツ、と思う。

——どこ行きの電車に乗れば……っ！

(くう……っ！　せっかく切符を手にいれたのに……)

その時、

「その切符を持つのなら、どの電車に乗っても同じですよ……少年」
「さ、さっきの外国の人さん……」

日本語ペラペラな銀髪な外国の青年だった。
あの時は忘れていたけれど、今は春なんだけどその格好は熱くな

い？

と心でツツコミを入れてみる。

「フッフ、奇妙な名を付けられましたね」

「うわぁー、ごめんなさい」

そういえば、名前を知らない（初対面ですから当たり前）。

「いや、気にしないでください。さあ、それよりその電車に乗りましょう」

「うん？　というかこの切符の事を知ってるの、おじさん？」

「お、じさん……」それを含めた詳しいお話”は着いてから、ということで”

青年はさあ、と言いながら条一と電車に乗る。

「あのおゝ着いてからって何処に？」

さすがに行く先が分からないのでは不安になってしまふ。
しかも知らない人に連れられてとか。

「ご安心を。この切符を持つモノが向かう先はただ一つです」

青年は周りを指さしながら言う、

「さあ、御覧なさい。少年」

「周りを指ささないでくださいよ、みんなこっちを……っ！」

条一と青年が乗っている車両の人達が全員が突如と消えた。
まるで最初からそこには誰も居なかったかのよう

「どうなってるの……ほ、他の人達が消えた？」

「違います。不正解です少年。答えは我々が乗る車両を変えたので
す」

うえ、と条一が驚がそれに構わず続ける、

「私の名は伊藤・ガゼ・ロベート。そして向かうは——超能力者の
み集まる駅」

第02話：チームと少女とリーダーの力

条一は目が点になり口をポカンと開け、目の前の青年を見る。

「どうなってるの……ほ、他の人達が消えた？」

いいえ、と青年は首を横に振る。

「違います。不正解です、少年。答えは我々が乗る”車両を変えた”のです」

うえ、と条一が驚いたようだが、構わずに続ける。

「先ずは自己紹介から致しましょう。私の名は伊藤・ガゼ・ロベート。そして向かうは――、”風変わり”とも”異常”とも言える裏の駅」

さあ外を御覧なさい、と窓を指差す。

条一は未だに点になった目を窓に、つまり外に向ける。

「え……っ！ ど、どうなってるの？」

黒と白、灰色に塗りつぶされた景色。

空も雲も地面も建物も、窓の外にあるモノ全てが、まるで白黒テレビでも見ているかのようだ。

「……スゲー」

「フフフ。さあ、着きましたよ」

ガゼの言葉と同時に電車はゆつくりと停車した。
そのままガゼが開いた扉から外に出ようとした時、

「ガゼさん」

「？」

どうかされました？、と首を傾げながら振り向く。

「俺は泉。泉条一と言います。歌空第三高校一年生！」

フツ、とガゼは笑い、

「泉条一。我々の駅にようこそ——この駅に辿り着いたという事は、今から君は私達と”共通の繋がりを持つ仲間”であると同じ。まあ、つまりは……これから宜しく願いますよ」

「——はいっ！」

——歌空中部駅。

表にあるのは何処にでもある”普通の駅”。

裏にあるのが超能力者のみが集まる”風変わりな駅”

物語は、少年と青年。二人の出会いから既に始まっていた。

- - - - -

「きっひっひっひ、スゲーー！ 誰もいない！」

乗った駅は歌空中部駅で着いた駅も歌空中部駅。何か不思議だなー、同じ駅から同じ駅に降りるなんて。

ちなみに、この駅は地上に駅舎、地下にプラットフォームと言う風に構成されている。

二つの駅の外見は同じだけれど中身が全く違う。

どういう風に違うのかと言うと。先ず人が誰もいない。

電車から降りたばかりの二人。プラットフォーム内を見渡すが確認できる人物は二人だけ。

条一とガゼ。

次に違うのは、色。先ほど窓から眺めた景色と同じく。

全てが黒と白と灰色なのだ。

物凄く違和感を感じるが、条一は素からそういうの気にしない子なので。

「駅舎に行きましょう。泉条一」

先を進むガゼが言う、

「上にはもつとビックリするような事がありますよ」

「本当？」

ガゼはそれに笑顔で頷く。

「おおー！」

条一はガゼを急かす様に言う、

「早く行こうよガゼさん！」

「はいはい」

二人は近くのエスカレーターで駅舎に上がる。

ソックリだと全然違うなー、と呟きながら上がり終えると、

「ふざけんな！ この野郎！」

「んだと！」

――刹那――

前方から聞こえる二人の男の罵声と共に、駅全体が揺れた。

――烈風により。――

外側に吹き飛ばすような衝撃の風。

危うく条一はエスカレーターに落ちそうになるが、ガゼが支えてくれた。

「あ、ありがとう……ってうわっ！」

――衝撃っ！――

再び吹き荒れる風。

さつきとは比べ物にならないくらいに強い。

ガゼが支えていなければ条一はエスカレーターにダイブしていただろう。

「ど、どうなってんの？」

視線を前に向けると、駅舎の丁度真ん中に二人の男が互いに睨み合いながら罵声を言い合っていた。

「だーかーらー！　パイと言えばアップルパイと相場が決まってるだよ！　クソ野郎」

「テメエの脳内回路にバグがあるんじゃないのか？　アップルパイが相場だと？　夢と現実の区別くらいはつけれる！　チヨコレートパイこそが最強！」

「ふざけんな！　チヨコ野郎！」

「んだと！　テメエ！」

と同時に二人がそれぞれ左手で持っていた切符が宙を舞い、一瞬だけピカーンと光り輝いて消える。

今度は右側に立つ男の左手を中心に内側に吸い寄せるような風が巻き起こった。

条一は又しても風の中に突っ込んでしまいそうになるが、ガゼに支えてもらう……ガゼさん何度もすみません、と心の中で謝っておく。

左手に集まった風は、段々と原型を留め風の大剣を生み出した。

左側に立つ男も同じ用に武器を作り出した。けれど、種類と属性が違う。

彼が左手に持つのは炎の槍。炎の熱は風と交わり熱風となり条一達を襲う。

「あつ……っ！　あの、ガゼさん？　もしかこれが噂に聞く超能力者？　しかもそのバトル？　スゲーーよ」

「はあゝ。全く恥ずかしいところを見せてしまった……」

喜ぶ条一だがガゼは深い溜息を付いて頭を抱えた、

「バトルというより仕様がない喧嘩です……」

「リーダーお帰りー」

リーダー？ と条一は頭を傾げながら、3、4メートルほど離れた所からにこちらに手を降っている女性が見えた。

というか、今まで中央の二人に釘付けになつて気付きもしなかった。けれど、周りを良く見えると駅の隅や端に結構な人数の人がいた。

でも、一人足りとも中央にいる二人など気にもとめないでいる……何で？

「ええ、ただいま。それより今度はどういう理由で？」

「”チョコが一番だあー”！ とか”最高なのはアップルうー”！ と好みのパイについてですうー」

女性はガゼと条一に近寄り中央に立つ男達の喧嘩の理由を説明する。

肩までの茶髪ショートヘアー。パツと見た感じでは明るくて優しい感じだ。

「あれえー？ 新入りいー？」

視線を条一に向けて訪ねる。

一瞬だが可愛いと思ひドキッとしたのは余談である。

「え、えつと。はい。いず」

――斬撃っ！――

カキン、とまるで金属同士がぶつかる様な音に遮られた。

二人の男が動いたのだ。

「アップルパイだアアアア！ バカ野郎！」

「ふざけんな！ チョコレートパイ万歳イイイイ！」

――斬撃っ！――

再びぶつかり合う、風と炎。剣と槍。

男達の（好みのパイへの）想い。

「自己紹介は後にしましょう。先ずはあの二人を止めます」

ガゼは前に出る、

「危ないので……ちょっと下がっていなさい」

「はぁーいいー」

「ガゼさん……」

「大丈夫ですよ。それよりよく見ていなさい泉条」

ガゼはコートのポケットから一枚の切符を取り出す。

その切符は黒い切符ではなく、何処にでもある普通の切符だった。

「我々、力あるモノの超能力を」

切符を手放す……が落ちない。

宙に浮いてる。

「そしてこれが、歌空中部駅を拠点とする”超能力チーム・デミング”がリーダー」

二人の男達とは違い、輝かず。

まるで手で丸めていくかの様に小さくなる切符。

どんどん小さくなって小さくなって……更に小さくなったと思っ

たら、

――消えた。

そう。これがつまり超能力が発動したということ。

ガゼはスツと右手を振り上げると、右腕に集まる青色と銀色の光の粒。

それらが多数集まり徐々に形を作っていく。

後ろからそれを見ていた条一は「なっ……！」と口から驚きのセリフが漏れた。

それもそのはず、大きさが明らかにおかしい。見た感じだと4～5メートルはある。

まるでそれは巨人の腕だ。

「伊藤・ガゼ・ロベート。私が彼らに送る制裁の拳」

争っていた男たちは自分たちに向かってくる人を見て、「え？

リーダー」とか「いつ戻って来たんスか」など口に出している。

しかし今ごろ気づいてももう遅い。

何故なら巨腕は既に振り下げられたいたからだ。

「グランレブラ
巨人の腕力」

――打撃っ！――

第03話：能力者社会

——歌空中部駅。

島式ホーム2面4線で、地上に駅舎にプラットホームが地下に存在する鉄道駅だ。

一般的には地下駅の類にカテゴリされる駅構内をしている。表面世界にあるのが何処にでもある”普通の駅”。

裏にあるのが超能力者のみが集まる”風変わりな”又は”異常な”駅。

表と裏、超能力者を除いて何が違うのか。

それは”人”と”色”。

超能力者のみが入場できるが故に普通の人々はいない。

裏は表と違い、空も地面も空気もモノも色がない。いや、厳密にはある。

黒と白と灰色。そう白黒テレビかのような。

そんな裏の歌空中部駅。

駅舎の中の丁度、真ん中あたりに二人の男が正座で座っていた。ちなみに言うが二人は好きでこの様な体制で居るのではない。

目の前にいる青年に説教を食らわされている。

青年曰く、「反省会」。

その光景を半分バーと化したみどりの窓口でミルクを飲みながら眺めていた少年。

泉条一は「ガゼさん……コエー」と呟いた。

それもその筈だ。男達が何かを口にする度に、右腕を軽く振り回す。

普通なら軽く振り回すだけで何ビビってんの？とか言われそうだ

が。

忘れてはいけない、ここは超能力者が集まる裏の駅。

”風変わり”や”異常”とも言える駅で、そんな人達が集まる。そう。つまりだ。今の青年の右腕も普通ではない。

一言で表すのなら。巨腕。それも4〜5メートルはある。

それを目の前で振り回されたら、誰だって怖いと思うに決まっている。

条一は絶対にガゼを怒らせないと心に誓い、ミルクを飲み干す。

「ジョー君、お待たせえー」

カウンターの中から小さなダンボール箱を片手で持ちながら少女が出てきた。

肩まである茶髪のショートヘア。見た目も中身も明るくて優しい娘だ。

此処に来て最初に声を掛けてくれたのも彼女だったりする。

「ゴメンねえー。探すのに手間取ったあー」

リアン。それが彼女のコードネームだ。

何故にコードネームなのかと言うとリアン曰く「裏の住人って感じがするうー」。

とのことなので此処に居る人達はコードネームを名乗っている。

まあ、ガゼや他にも本名を名乗っている例外もいるのだが。

ちなみにジョーが条一のコードネームです。

ボクシングとは一切の無関係です。ハイ。

「チケットケースに……腕輪に……入隊祝の切符三枚つと」

「おおー、何か超能力者って感じがしますね！でも何で切符？」

「ん、切符？それは後の、お・た・の・し・みいー」

「分かったよ、ありがとリアン」
「にははぁー、どういたしまして」

リアンが持ってきたのは所謂、入隊祝い品というヤツだ。
切符入れの小さな目のチケットケース。

D M Gと赤い文字で書かれた皮革の腕輪。ちなみにこの腕輪が、
ここを拠点とするリーダーガゼの超能力チーム、デイミングのメン
バーである証でもある。

それと未使用切符三枚。

さくつ、とケースを腰に。腕輪をつけて、切符をケースに入れた。
条一は心の中で感動の涙を流す。

おおー、涙モノです！

天国のお父さんとお母さんと我が弟よ！ 僕はなれたのです。超
能力者に！

「似合ってるねえー。んじゃー、後は待つただけだねえー」

「早く来ないかな」

実は先程から、とある人物を待っていたりする。

条一のサポート役。

これは先ほどリアンに説明して貰った事だ。

5円で買える黒い切符（通称：5円切符）は超能力者を管理する
ギルドに登録した証である。

どう言う仕組みかはリアンも分からないが、その登録をする事で初
めて超能力者を使う準備が整う。

んで、超能力者は基本的に3人以上6人以下でチームを組んで行
動する。

このデイミングはメンバーが23人と大きい方らしく、拠点があ
る珍しいチーム。けれど本当に”デイミングとして活動”している
のはガゼを含めた5人だけらしい。

詳しい事を聞こうとしたが、「それ以上はリーダーから、ね」と言われた。

んで、条一はチームの基礎を学ぶために今から来てくれるサポート役の人と、このリーダー・伊藤・ガゼ・ロベートと仮のチームを作って数日の間だけ、早く今の状況に慣れるようにと行動を共にする。ということだ。

「早く超能力をバシバシ使いたいイイイイイ」

超能力！ 超能力！ 超能力と口にする度にテーブルを叩く。

「せっかちなあー、ジョー君はあー」

リアンは自分のコップに水を入れる、

「そういう男はモテないぞあー」

モテないぞーという言葉で条一の動きが止まる。

そして思い出す。一人の少女の事を。

今朝、見た夢。自分が一つ年上の少女に告白する夢。でも完膚無きまで拒絶された挙句に学校中に失敗談をバラすという悪夢。

今日のアクシデントである夢は正夢じゃないのかと思ったりもした。

いやいや、そんな事ないないない。だから超能力で自分を変えるんだ。

この力を見れば彼女だって……あれ？ フツと条一は思った。そういえば。ガゼさんもリアンもこの駅は超能力者のみしか入れない云々と言っていたような。

「あの一、リアン。この駅って超能力者しか入れないんだよね？」

「もおー、ジョー君！ それさっき言っただよー！」

条一の最後の砦が壊された。そんなバカなあー。どうしてえー。何故に神は僕を見放すんだー！ と心の中で叫ぶ。と、その時、

「あー遅いよあー。藍っちいー」

誰かがみどりの窓口に入ってきた。

たぶん、俺のサポート役って人かなと思うが、見向きもしない。

今は自分の計画が崩れ去った事で希望が無くなってしまったのだ。

ああー、俺はどうしたらいいのだろう……と誰にも聞かぬよう呟く。

「この娘がジョー君のサポート役だよあー」

「初めまして」

透き通った綺麗な声だった。けれどまるで感情が籠っていない。

でも……アレ？ 何処かで聞いた声だな。

「サポート役の藍華。よろしく」

聞き間違えではない。これは……これは……この声は。

条一は伏せていた顔を上げる。

「加藤、先輩……っ！」

学校が終わって直ぐに此処に来たのか制服姿。

制服は紛れなく自分と同じ学校のモノだ。

しかも、ソレを着ているのが先ほど廊下でアクシデントに巻き込んでしまった。

腰まで届きそうな黒髪に、それと同じ黒い瞳。カワイイ感じの
つ年上の少女だった。

かとうあいか
加藤藍華……（下の名前は初めて知る）。

「あれえーお二人は知り合いなのかなあー？」

「同じ学校なんだ。俺は一年だけど」

正直に言えば条一は焦っていた。あれ程、（まだ使い方さえ知らないが）超能力を使えることを自慢しようと此処に連れてくる事すら考えていた。

けれど、実際に会つと。気不味い。物凄く気まずい。

何故なら学校で”あんな事が有ったんだ”。

思い出すのは、先輩を押し倒した自分。

蘇るのは、右手から伝わった胸の感触。

（ヤバイです……これまでに何くらいにジョー君はヤバイ）

どうしよう、と考えていた所で藍華が口を開いた、

「……誰？」

色々な意味でショックです。

第一章：第04話：過去からの使者 - 発端

黒い雲が覆い尽くした。太陽は雲に隠れて彼此20分が経つ。時々、青色と銀色が混ざった雷が、

――衝撃っ！――

地に落ちる。地響きを鳴らすと同時に駅全体を揺らした。二人の男達は正座をしながら天からの声にただ頷くだけ。

「ですからして、喧嘩という仕様もない争いで超能力を使用するなと言語道断。以後気をつけてください」

空という名の青年はソレを告げて。

雷という名の自らの能力で生み出した青色と銀色で構成された巨腕を消す。

チラリと少しばかり後ろに振り向く。半分バーと化したら”みどりの窓口”。

視線は、その中にいる三人の男女に向けられていた。やっと来ましたか。藍華。ではそろそろ私も。

「お二人さん。新人君を待たせているので」

「お、おうリーダー……」

「う、うむ。頑張れえー……」

良い子で助かりました、と呟き二人の男に背を向ける。その瞬間、再び二人の男が互いの（パイへの）想いをぶつけたのは余談である。

青年の名は。伊藤・ガゼ・ロベート。
超能力チームが一つデイミングを率いるリーダー。

- - - - -

――打撃っ！――

破壊されたのは道を立ち塞ぐ数多のモノ。
それは壁、床、天井。動物、人間も例外でもない。前にあるモノ
は全て消す。

――衝撃っ！――

ドオオンと音と鳴らし揺れる建物。

何故か？

破壊するのは拳。

拳に、両腕に纏う”銀色の腕”。

それは幾つもの光の粒が集まり構成された”異常な腕”。

全長約6メートルの巨腕。右と左。二つの腕を軽く振り回す。

只それだけで病院の建物は悲鳴をあげる。

けれど、少年は気にもとめない。

建物が揺れようと。壊れようと。

ケガや病気を抱えた人達が叫ぼうが。壊れようが。

——だって、彼の目的は一つだから。

「フッフ、見つけましたよ。目標者^{ターゲット}」

高温となった蒸気が燃える。”赤い”光を発した、ソレを背景^{バック}に
して言う。

同じ赤い色。けれど、液体。”ソレ”を浴び、全身が赤一色に染
められた少年が。

目の前でコチラをビクビクと恐怖する二人の子供に。

怯えた目で”赤く染まった少年”を見る、10歳前後の男の子と
女の子。

「わ、私が守るから……っ！」

女の子がそう言い、男の子を庇うように前に出て”赤い少年”を
睨む。

「戦う必要はないよ。自分の事は構^{コレ}わないで、君だけ逃げて」

女の子は顔だけ振り向く。

瞳に映るモノは男の子の決意した表情だった。

全てを諦めることを決意した。生きる事を諦めた覚悟。

故に、自分自身の事さえも”コレ”と呼んでいる。

「話したよね？ 僕は生まれながらにして”苦しみと死の運命”を
背負っている事を」

聞き慣れた、そのセリフ。

思い出すのは、自分と彼が出会った時——3年前の事。
入院生活の日々で退屈気味だった女の子。

看護婦さんが自分より一個年下の、同じく入院してる男の子を紹介してくれた。

病院で初めて友達が出来るとワクワクしてその子に会ってみると、

（僕は苦しく育って、死ななくちゃ行けないんだ。だから忙しいから、あっち行って）

（嫌）

即答で答えた。

女の子はベッドで座り込んでいた男の子に近づいて、言う。

（良く聞きなさい。電波くん——貴方がどんな風に育っても、死んだらダメ。お父さんやお母さんが泣いちゃうよ？）

（……な、泣かないよ。パパもママも一城^{かずき}だって……）

（うそでしょ、それ）

（嘘じゃないよっ！）

（なら、私が泣く）

（え？）

（変人くんが死んじゃったら、私が泣くから。生きて）

数ヶ月後、女の子は男の子を残し退院した。

けれど、時間があれば毎日のように、今日までお見舞いに来た。

最初は笑わなかった男の子は最近になって笑顔を見せてくる様になり。

「苦しみ」や「死の運命」は口にしなくなった。

——銀色の髪を持つ少年が現れるまでは。

嫌い。弱い自分が。

憎い。力がない自分が。

また、男の子に「運命」など口に出させた事が辛い。
だから、今はコレしか言えない、

「安心して電波くん。私なら僅か数分でアイツを片付けるなんて朝飯前。何故なら、貴方の終点駅はここじゃないからっ！」

これでいいんだ、と前を向く。

少年は、フンと鼻で笑う。

「アレほど力の差を分からせたと云うのに、まだ向かうと？ 僕に立ち向かうと？」

「も、もち、ろんよ……」

女の子の声は震えていた。足も……震えていた。アイツが怖いから。

逃げろ、と心が訴えてきた。アイツには敵わないから。

でも男の子を、自分の大事な友達を守りたい。

守る？ つまりアイツと戦わなければならない。アイツの狙いは自分の友達だから。

勝てる？ 否。勝ち目がないと分かっているから恐怖を感じる。

逃げたいと思ってしまう。

——「迷い。」 命を賭けて守る”か、” 自分の命を第一に考え逃げる”か。

「バカですかオメエは？ 前線に出てから迷うな」

「……っ！」

——「打撃っ——」

振り上げた巨腕が女の子を襲う。

けれど、顔前で止まった。

少年の意志に反して、勝手に動かなくなつた。

「どうなつて……」

——消失——

銀色の光の粒で構成された巨人の両腕が消えた。

パリン、とガラスが割る音を上げて。

なあ、と少年は驚きの声を漏らすが。

直ぐ様に状況を把握した。

それは、

「貸切乗車券……貴方の能力、巨人の腕力グランレブラを封じるっ！」

女の子の仕業だ。貸切……説明通り。一つの能力を使用禁止に出来る。

チッ、と舌打ちが出てしまった。

自分の能力は一つのみ。ソレを封じられた。

つまり戦う術が無くなったと言う事。

「今だっ！」

女の子はポケットから二枚の切符を取り出す。

それと同時に少年に向かい駆ける。

（迷う必要なんてあるの？ ううん。私は彼を守るっ！）

右手に持つのは海南駅行きの片道乗車券。そこに眠る力と色は”
超感覚の緑色”。
精神感應。

左手に持つのは黒江駅行きの往復乗車券。そこに眠る力と色は”
念動力の赤色”。
バイロキネシス
発火能力。
そして念じる。

——発動、と。

宙に舞った切符は直ぐ様、小さく輝き消える。
少年の懐に入り込む。
左手を少年に向け、

——炎火っ！——

少年は体が、軽く数メートルは吹き飛ぶ。
女の子から発せられた炎の塊を受け。

「くっ……子供^{ガキ}がつ！」

攻撃は受けた所に火傷の跡があるが、気にはしない。
ただ目の前にいる”敵”を見据える、だけ。

「抵抗しなければ見逃そうかと思いましたが……なるほど、それが
オメエの答えですか」
「よ、余計なお世話よ。彼は私が守る、だから貴方を倒す。その為
の対策もここに」

少年に見せる、”5枚の切符”と”右手に持つ緑の玉”。

「フフフ、なら楽しませて貰いましょうか？」

第05話：超能力講座

何故か思い出してしまった。

忌まわしき、あの日の出来事を。

忘れたい。逃げたい。

自分が犯した罪を。

——けれど、何処まで行っても追いかけてくる。

否定するたび。

拒絶するたび。

心の底から這い上がる、
”悲しみ”と”苦しみ”という名前の
感情”。

（私が守るから……っ！）

名は知らない。

何回も打ちのめした、女の子。

絶望的な力の差を与えても、幾度となく立ち上がった。

彼女との最後の戦い。

死ぬ寸前まで、諦めずに自分に向かってきた。

強い子。

（や、やめ……って。友達をイジメるなっ！）

女の子が守っていた男の子。

ターゲット
削除対象であった目標車。

彼の名前も知らない。

知っているのは”自分の生きる意味を見い出せないでいた”、という事。

超能力や特別な力がある訳でもなく。

ただの無力の子。

普通の人間。

弱くて脆い心を持った。

けれど、友達は自分の事コレより大事にしていた。

優しい子。

——あの日、自分に芽生えた芯こころ。

互いを想い合っていた。

自分は、そんな二人をこ——、

「リーダー、何をボオーっとしてるのぉー？」

「うっ」

深く考え込んでいた為か。気付かぬ内に、みどりの窓口に到着していた。

リアンが、おーいいー大丈夫かぁーと心配そうに顔を覗かせている。

というかリアン……顔を近付け過ぎです。

「ええ、ご安心を。それより、一先ず離れてくれますか」

「おおおー」

人差し指をリアンにオデコに当て、押して顔を遠ざける。

私が来たことに漸く気づいたのか、何かを話していた泉条一と藍

華が振り向く。

ハテ？ 泉条一の顔が沈んでいるように見えるのは気のせいか。

「皆さん揃った事だ。表の駅に上がり能力と仕事の説明を致しましょう」

「……っ！ やつと超能力が使えるんだ！ なら早く行こうよ！」

能力という単語に反応して、急に明るくなった泉条一。

今日、彼をお会いした時にも思いましたが、喜怒哀楽が激しい子ですね。

フフフ……まあ、だからこそ藍華を彼のサポート役に任命したのだが。

私の目に狂いが無ければ、救ってくれるはずだ。

そう、泉条一なら。

「先にプラントホームに行ってますねっ！」

泉条一は、そう言うのと外へ駆ける。

我々に心を開いてくれるのは嬉しい限りですが。

しかし今日会ったばかりだというのに随分と……。

将来、変な人に引っかけから無いか不安になってきましたよ。

「少年A。”プラント”じゃなくて、”プラット”フォーム」

藍華が静かにツツコミを入れる。

けれど藍華、貴方も……、

「藍華。少年Aではなく、泉条一です」

全く、幾つになっても人の名前が覚えられないとは。

そう思っていると、エスカレーターから二つの音が聞こえた。
一つ目はドオオンという何かが落ちる音。
二つ目が「いったゝいっ！」という叫び声に近い音だ。

「泉条一、そんなに急がなくても超能力は逃げませんから」

とガゼも条一を追いかけようにみどりの窓口を出る。
しかし先に行かれるとは、しかも走って……子供ですか、貴方は？
というか、高校生なんですよ、彼は。

「リアン、後は頼みました。そして藍華、我々も行きますよ」

「はぁーいいー。任されたぁー」

「うん、ガゼ兄」

二人は頷き。

リアンはその場で、いつてらっしゃいいーと手を振り。
藍華はガゼの隣を歩く。

- - - - -

――歌空中部駅。

今回は裏から表に出発する。

つまり”風変わり”又は”異常な”駅から”普通の駅”に行く、
ということだ。

表裏の違いは以前にも説明した通り。

裏の駅は表の駅とは違い。超能力者のみが集まり、人を除いた全
てのモノの色が黒白灰色。白黒テレビが如く。

表から裏に向かった時は、電車に乗るコト僅か数秒後に周りに居

た人達が突如と消えた。まるで初めからその居なかったかのよう
に。

まあ、実は消えたのは”条一達”の方であり。
ガゼ曰く「超能力者専用車両」に乗り換えた、だけ」らしく。

で、裏から表に向かう時は、最初から”超能力者専用車両”に乗
らなくてはならない。

けれど、実際に裏の駅に来た電車は外からじゃ”普通の電車”と
変わらず、というか全く同じであるので。何処が専用車両なのか見
分けが付かない。

ハテ？ どうしたモノかと悩んでいたら、

「裏の駅に居るときは、何処から乗車しようと、そこが”専用車両
”ですよ」

つまり、普通に乘れば良いってことだね？ と納得して電車に乗
った。

ここに来るときは気付きもしなかったけれど、誰もいない電車つ
てちよつと不気味、だと条一が思ったのは余談です。

それから、来た時と殆ど同じ時間を掛けて、元の表の駅に到着す
る。

”誰もいない電車”から降りた瞬間に条一は驚いた。

扉から出ると同時に後ろから人が波のように押し寄せてきたのだ。
その所為でガゼと藍華と別れてしまったが、駅舎内で直ぐに合流
できた。

いきなり人の波に襲われたことを話したら、

「申し訳ない、最初に教えて差し上げれば良かった。専用車両から
出ると普通の車両に戻されるのです。フッフ、他にも戻る方法があ

るのですけれどね」

「……な、なるほど、スゲー」

一拍の間を置いて、条一が言った。感心したような口調だが、今日は色々な事が起こりすぎて、頭の整理が追い付けないでいた。”
今から超能力を習うのに大丈夫だろうか？ 不安になって来たよ。いや、僕なら出来るっ！ ダイジョーブだよリンゴ君”と頭に書いてある。

「それじゃ、ガゼ師匠！」

「え？」

条一が何の前置きもなくガゼを師匠と呼んだ。

あまりにも突然過ぎて、首を傾げる。けれど、直ぐ様に意味を理解した。

ガゼが条一に超能力を教えるから、”師匠”。

条一に、「はい何でしょう」と頷く。

「どうやったら超能力を使えるのですか師匠っ！」

「先ずは切符を購入してください。今回は練習なので1000円まで。分かりましたか？」

人差し指で券売機を指しながら、ガゼは言った。

「え？」

先程の出来事を見ていたので超能力に切符は必要かな、と思っていた。
はいた。

けれど、超能力の使い方を尋ねて、真っ先に切符が出てくるとは考えもしなかった。

だから条一は驚いた。

「切符^{イコール}超能力。コレ常識」
「うエエエエエ？」

カッコいいのか、カッコ悪いのか、反応に困って色々な意味でシヨックです。

- - - - -

「では私は仕事を貰いに行くので……藍華、泉条一に超能力と切符の説明を頼みますよ」
「了解」

今、条一達は券売機の前にいる。
何のために？

それは勿論、切符という名の超能力を買う為に決まっている。
ガゼは一人で何処かに行くので。彼が戻るまでに条一は藍華に詳しい説明を教えてもらうのだ。

（……でもアレ？ よぉ〜っく考えてみると……先輩と二人きり！
だという新事実）

美少女とも言える彼女と、向かい合うだけで緊張も倍増した。
地味な条一とは向かい合っているだけで不釣合である。
でも、何かと条一は嬉しかったりする。

「どうしたの？」

ぼうつとしたまま動かない条一を見て、藍華が首を傾げた。

「説明するから。きちんと聞いてね」

「は、はい」

「まず。超能力を大まかに分けると二種類」

右手を糸一に見せて、ブイの字を作る。いや、二だ。

「共通能力コモンと個別能力パーソナル。この二つの違いは、”発動の仕方”と”扱える能力”。」

因みに、能力者の9割は共通能力コモンしか使えない」

藍華は糸一に合わせているのか、ゆつくりと説明してくれる。
けれど、

（ヤバイです。専門用語ばかりで分からないです。折角、先輩が直々に説明してくれてるのにー！ 俺のバーカアアアア！）

心の中で自分の頭の悪さにツツコミを入れました。

第06話：サディスト兄妹

「先ず。超能力は二種類」

右手を条一に見せて、ブイの字を作る。

いや、二の字（？）だ。

「共通能力「コモン」と個別能力「パーソナル」。二つの違いは、”発動の仕方”と”扱える能力”」

藍華は条一に合わせているのか、ゆつくりと説明してくれる。
当の本人は頭を整理しつつ忙しかったりするのだが。

「一人に付き使用可能な超能力は一つだけ。コモンかパーソナル。二つはない。」

因みに、能力者の9割は共通能力「コモン」しか使えない」

分かる？ と藍華が首を傾げて問う。

条一はニコニコと笑いながら3、4回と首を縦に振り、

「わ、分かりますっ！」

思わず大声を出してしまった。周りの人達が眉をひそめ、こちらを睨む。

「……続ける」

一拍の間を置いて、藍華が言った。

普段から吊り気味の目が、更に釣り上がって見えるのは気のせい

だろうか。

——スウイ

「？」

藍華が急に条一に右手を差し伸べる。

ハテ？ 何をするのだから、と考えていると。

藍華が視線を逸らした。

「良く聞きなさい、矢吹。君の能力判定する。5円切符を出して私の手握って」
「っ！」

条一の頭の中に一線の閃光が走った。

（せ、先輩とっ！ 俺がっ！ 俺がっ！ 先輩の？ てててて、手をに、握る？）

今の今まで想像や妄想という名のシミュレーション上でしか体験できなかった事が、現実で体感できる、だと？ 条一は夢にさえ思っていないかった事に心の中で歓喜を上げる。

が、直ぐに静まった。

何故か？

藍華の様子がおかしい事に気づいたからだ。

先程から目を釣り上がらせて、まるで”怒っている”感じがする。加えて目も合わせてくれない。これでは、まるで——、

——嫌々やっている、みたいではないか。

（もしかして俺って、嫌われてる……？）

ネガティブに考えだすと次々への考えもネガティブになってくる。

「はやく」

「あ、はい」

いつも通りの藍華の声。感情が籠っていない、透き通った綺麗な声。

けれど今は”怒”が込められている、みたいに聞こえる。

（ええい！ 俺のバカっ！ もっとポジティブに考えよ！）
「……！」

藍華が、顔を強ばらせた。

条一の指先が、藍華の手に触れたのだ。藍華の反応を見て思わずまた手を離してしまうが、勇気を出して彼女の右手を自らの左手で握った。

刹那、女の子特有の柔らかい手の感触を感じる。

それが更に憧れの先輩のモノだから心臓の鼓動がいつも以上に早いのが分かった。

- - - - -

ガゼ兄に頼まれた。

サポート役を。

私こと藍華が。

誰の？

目の前にいる私の手を握ろうと躊躇している少年の。
本当は嫌だった。サポート役になるの。ガゼ兄以外の人とチームを組む事が。

別に彼が嫌い、という訳ではない。

唯単に私が他の人達を好きになれない、だけのコト。
だからコレが終わったら直ぐに、さようなする。

分かってる。ガゼ兄が私のコレを治そうとしてることくらい。
自分一人だけ依頼クエストを受けに行っただのは、二人きりにするってコトくらい。

「……！」

少年……（名前なんだっけ？）の左手が私の右手に触れた。

——刹那、握った。

能力確認の為とは言え、好きじゃない。
だって、他人と触れなきゃダメだから。
コレが最初で最後なんだから、ガゼ兄……。

「あっ！」

自分の手を握る人物に聞こえないように呟いた。

——良いコト思いついた。

私にこんな事をさせたんだから。

”罰”は受けて貰わないとね。

考えただけで、心の中で笑っている自分がいるのが分かる。

その所為か、□元が気付かぬうちにニヤリと吊り上がっていた。
私は視線をゆっくりと上げて少年を見る。

身長差があるので、必然的に上目遣い見上げる事になる。

「
……」

少年と目が合った。

瞬間、私はわざと顔を真っ赤に染める。

演じる役は誘拐されそうなか弱い女の子。
演劇部であるから。楽勝だった。

あれ？ 少年も顔が赤い。何でだろう？
そう思いつつ次にステップに移す。

「きゃあっ！」
「うエ？」

悲鳴を上げて、その場に崩れるように座る。

少年は奇妙な声を漏らしながら、あたふたしている。

よし。ここまでは計算の内。
次が本場だ――。

「や、やめて下さい！ 離してっ！」

表情も歪めて、今にも泣きそうな顔を作る。

「ちょ、せ、先輩？ 急にどうしたんですか？」

騒ぎを嗅ぎつけて野次馬が集まってくる。

その度に少年は焦り。動こうとするが、私が強く彼の手を握る。離さない為に。

傍から見れば、少年が少女を無理やり何処かに連れて行く感じだろっ。

「私、私は……」

泣く。

勿論、嘔泣き。

「だ、誰か助けてっ！」

警備の人が漸く気づいたのか、コチラに向かってるのが見える。

——計画通りっ！

横目で少年を見ると、何故かボウーと私を見つめていた。だから、心の中で謝る。

名もなき少年、ごめんね。

「たわけ」

——打撃——

「いたっ」

軽い衝撃が頭に響いた。

頭を抑えながら後ろを振り向くと、

「俺は君をそんな風に育てた覚えはないぞ、我が妹」

「うっ……ヲタ兄」

実の兄が、私を上から見下していた。

――打撃――

「いたっ」

また叩かれた。

しかも拳で。

「家でも外でもオタクと言うな。全く君は頭が良い。けれど人の名前の一つもまともに言えずに社会に出れると思うか？ 答えは否だ。自分に都合が悪い事や嫌な事が有ると得意な演劇で他人に迷惑を掛けた拳句に逃げるなど言語道断。兄として恥ずかしいぞ？」

口調は少しきつめ。でも本当は優しく誰からも頼りにされている人。

オタクなのに……。

けれど、自分ワールドを展開すると熱弁したり話がいちいち長くなるのが欠点。

オタクが故に……。

加藤摩かとうまする。それが私の兄の名前。

第07話：公園にて降る雨

藍華の一人芝居騒動は、何かとアクシデントの連続で無事、失敗に終わった。

アクシデントの”連続”と言っても二つしかない訳であったのだが。

というか、アクシデントと呼べるのか？

まあ、藍華本人がアクシデントとして見ているので、そういう事にしておこう。

一つ目の障害は、兄こと加藤摩の出現。藍華は彼に合計2回も頭を叩かれた。

長話という説教付きで、だ。

けれど、警備員と野次馬への言い訳（対処）をしてくれた。お陰で問題にはなることは無かった。

——とある新人^{バカ}が何もしなければ。

摩が（自称）得意の口八丁で説明をしている時だった。

「き、きゃあ」

男声。しかも棒読みの悲鳴が駅内に響いた。

周りにいた人たちは声の発信源に視線を向けると、

——条一が懸命に藍華の真似をしていた。

「や、やめて〜 た、たすけて〜……」

その場に崩れ込むように倒れこみ。

手足を魚のようにバタバタさせていた。

「
……」
「
……」
「
……」
「
……」

重なる無言という名前の台詞。

藍華、摩、駅の警備委員と野次馬の心が一つになった。

（コイツ、何してんの？）

まあ、沈黙の妖精が飛び回ったのは少しの間だけ。

囲むように集まった人達の一人が笑い出す。

それに釣られるように、次から次へ沈黙は笑いの渦に変わっていった。

「……う、うむ……警備の方々よ。先ほど説明通り、これは”演劇の練習”です。駅内で他のお客に迷惑を掛けたことは謝る。けれども我々は初心が”オカマ役”を演じるには公衆の面前に立ち。先ずは恥という感情に立ち向かう心を手に入れる事から始めればいいと辿り着き。人が多く集まり駅内でソレを実行した、という事です。」

我ながら良くこんな嘘を、と思いながら頭を下げる。

後ろでは未だに”演技”を続けている条一を、不機嫌そうに見続ける藍華がいた。

- - - - -

——何で？

あれから20分後。私達は歌空中部駅の前にある”歌空公園”にいる。

公園の隅っこにポツリと置かれているベンチに腰を下ろしていた。

――何で、少年は？

摩兄は私と少年に説教中。

と言っても、一番悪いのは自分。

だから私に集中されている。

でも、文句は言えない。

――何で、少年は私の側にいるの？

漸く説教も終わり、摩兄は三人分の飲み物を買いに行く。

チャンスだ。

隣で少年が「何で怒られたんだ……」と首を傾げながら呟いる。

でも怒っている様子はなく。何処かニコニコしてる。

聞いてみよう。

――何で、少年はまだ私の側にいるの？ 何で笑ってるの？

「ね。矢吹」

「え、あ、はい？」

あたふたしながら返事をした。

やっぱり、少しながら”私を怖いと思っている”、と確信した。

「どうして。私の真似を？」

少年は、え？ とキョントントする。

そこまで驚くことなの、かな？ こちらまで驚きながら首を傾げてしまう。

「どうしてって……加藤先輩。能力判定の為の儀式か何かだからでしよ、アレって？」

「え？」

この少年は何を言っているのだろうか。
というか、本気でそう言っているのだろうか。

「なのに、何で”先輩のお兄さま”や警備の人は怒ったんだろう……ね、先輩」

少年は間違っている。

アレは本当は少年を落とし入れるための演技なのに……。

「あれ？ 先輩どうしたんですか？」

「な、何でもない」

少年はバカ。いや、純粹なのか。

両方だ。

純粹と書いてバカ。

天然と書いてバカもアリ。

「ガゼ兄を探しに行く……矢吹はココにいて」

「あ、先輩」

「なに？」

本音を言えば、少年と二人きりになれない。

罪悪感に襲われるから。
ピュア過ぎるよ……。

「俺、”矢吹”じゃなくて”条一”……」

「っ！ 一度死になさいっ！」

私はそう言い放ち、その場から逃げるように去る。

- - - - -

「っ！ 一度死になさいっ！」

普段から冷静で落ち着きがある藍華が焦りながら言った。
そして、ガゼを探しに公園を出た。

去り行く藍華の後ろ姿を見つめながら、条一は思った、

(……よ、余計に嫌われた……？)

シヨボーンと、肩を落とすと、

「うむ、君だけか？」

顔を上げると三つの缶ジュースを抱えた藍華の兄こと摩が立っていた。

「藍華はトイレにでも行ったか？」

「先輩はもう一人の連れを探しに行ったんです」

「うむ。その連れとやらは、もしかぜだろ？」

「え？ ガゼ師匠の事を知っているのですか？」

「ああ、あいつとは高校の時の同級生でな……ほら、
BONTAオ

ボんタ

レンジだったな」

条一に買ってきた缶ジュースの一つを渡して、隣に座る。
それを受け取り「ありがと」とお礼を言う。

「それより、一つ聞いていいか？」

「あ、はい」

缶の蓋を開けながら、頷く。

「何故に君は人が言い訳をしていた途中であの様な行動を？」

「ぶうつ……！」

飲んでいたジュースを吹き出しそうになるのを堪える。

「先ほど君は藍華に”能力判定”だと言っていた。しかし、俺には
そうは見えなかった。あの演技をしていた君は”何か別の理由”で
やっていた感じがした。違うか？」

うつ、と条一は声を上げてしまった。

そうなのだ。条一は”別の理由”でやったのだ。

「あ、あれでもお兄様……能力判定の為に俺は言っていなかったで
すよね？　というか、今さっきいた先輩にしか言っていなかったよう
な」

「うむ、それか。先ほど駅内で藍華を叩いたときに盗聴器を仕掛け
たからだ。それより、質問に答えて貰おうか？」

「……」

条一は思う、盗聴器は犯罪じゃないのかと。

けれど、摩は真剣な顔で条一に尋ねている。
ツツコミを入れる雰囲気ではない。

此処は冗談抜きで話そうと、決める。

お兄様から”あの人”と似た感じがするから、大丈夫だ。

「悲しい顔」

思い出すのは、二つの事。

一つは、心が揺れる程の、負に満ちた顔。

一つは、胸に刻まれたセリフ。

「藍華先輩……悲しい顔してました」

先ほど自らの犯した行いで怒られた藍華。

彼女を知らない人から見れば”気にしていない”な、と思うかも
しれない。

何故なら感情を顔を出さないから。無表情に見えるからだ。

けれど、条一は違う。

入学してから、今日までの二ヶ月の間。

ずっと、彼女を見ていた。

だから少しの変化さえも見抜ける自信がある。

「昔、俺は、何をすれば良いのか迷っていたんです」

部屋の片隅で膝を抱えていた自分。

他人が怖くて。

自分が怖くて。

何もできないでいた、日々。

「そんな時にひょこつと、”あの人”が現れて俺にこう言った——」

『自他に恐怖を抱くのは当たり前なんだよ、そんな事でビビってんなっ！』

昔に、自分に、他人にビクビクしてる暇があるのなら、自分だけの宝物を見つけた。

そして、宝物を誰よりも眩しく明るく輝かせるする方法を考えろっ！』

「——そんな事をする暇あるのなら、^{すきなモノ}宝物を笑顔にしろって「っ！」

「きっひっひっひ、だからですよ」

力無く笑う、

「藍華先輩を笑顔にしようとしたことなんですけど。俺って頭悪いから……し、失敗しちゃった……」

口に出すと、自分の無力さを思い知らされる。

何で、何をやっても。こうも失敗ばかりするのだろうか。

「うむ……訪ねておいてアレだが。本人の兄の前で、しかも初対面だと言うのに。全く君には色々と驚かされるよ……まあ、分かっただから顔を拭け」

摩は悟った。二つのことを。

一つは、少年の藍華への”想い”。

そして、もう一つは——。

「え？」

条一は顔を上げて、摩を見る。

「涙が出ている」

「うえええ!?!」

驚きのあまり立ち上がり、目元を触る。

確かに、条一は”涙を零している”。

自分も気づかぬうちに。

「お、俺、カッコ悪い……」

両手で目を押さえる条一は、途方に暮れた子供のような時、
その時、

——トン、と後ろから頭に何か乗せられた。

後ろを向くと、白いトップハットと白いコートを来た銀髪の青年
が立っていた。

デミングのリーダー、伊藤・ガゼ・ロベート。

条一の師匠。

「厳しい現実……はプレゼントしません。代わりに”優しい理想”
を差し上げます」

ガゼが条一の頭の上に乘せたのは、否。
被したのは。

緑色のトップハットだった。

「泉条一。今から依頼^{クエスト}に行きますが、来れますよね？」

第08話：過去からの使者 - 魔手

条一が涙でクシャクシャになった顔を洗いに行き。

二人の男達がベンチに残された。

片方、右に座る銀髪の青年は言う、

「フッフ、お久し振りですね、カス。君にまた会える日が訪れるとは思っても掛けなかった」

伊藤・ガゼ・ロベートだ。

白いトップハットと白いコートという格好をしている。

全身を白一色に染めているが、この白は光に認められた白ではなく。

闇から追い出され、行き場を無くした影の色。

裏の顔は、”超能力グループ”デミングを率いるリーダー。

——通称、赤腕。

もう片方、左に座る兄妹揃って同じ黒髪の青年は言う、

「カスと言うな、たわけ。それに最後のはどう言う意味だ？」

加藤摩。

黒いティーシャツと黒いジーンズというガゼと対照的な格好をしている。

だからか、ガゼとは逆。黒一色なのは、光に拒絶されたからだ。

光の世界に留まれず、辿り着いたのが裏の色。

加藤藍華という妹を持ち。彼女はガゼと同じ超能力且つ同じグループだったりする。

「ハテ、そのままの意味ですか？ 藍華によれば四六時中、部屋に籠り二次元の世界を堪能していると聞きましたので」

「そして君はそれに頷いたと？」

「ええ」

「少しは否定しろ」

この二人は同じ高校に通っていた。

行動する時は、ガゼと摩と、”もう一人”と常に一緒だった。

まあ、最初は仲が良かった訳じゃなく。

別に嫌いだった訳でもない。

”とある事件”を切っ掛けに今の関係を築いたのだ。

「それよりもだ、ガゼ。あの泉条一という俺の大事な妹を狙う輩は、”アイツが言っていた、あの泉条一”で間違いないのか？」

「私の目に狂いはない。だから、間違いありません。けれど……まさか、ヘタレや泣き虫という彼特有の特殊機能^{スキル}まで受け継いでいた、というのは予想外でありますけどね」

フッフ、とガゼは笑う。

思い出すのは、自分達二人を変えた人物であり。

いつも行動を共にしていた、もう一人の男。

「……そうか？ 受け継がれたというより真似事だ。それに似てるように似ていない」

「フッフ、相変わらず厳しいですね、カス」

「カス言っとなっ！」

「ああ、そういえば。リアンは裏の駅にいました。呼びます？」

「なあっ……よ、呼ばなくていい。というか、呼ぶな」

リアンという言葉聞いただけで顔が真っ赤になる。

ガゼは心の中で思う。

全く私の周りの人は、何故にこうも解りやすいのだろうか。

「……ガゼ兄、カス兄」

二人を呼ぶ声が丁度前から聞こえた。

視線をそこに向けなくても、この二人の事を”兄”と呼ぶ人間は一人しかいない。

「何で。二人が雑談してるの？」

「うむ、元同級生であり親友なのだ。会えば話はするのは当たり前ではないか」

「私としてはカスが妹に抱く異常な愛の話はうんざりしてきますよ

……」

「お、俺がいつそんな話をしたっ！ 嘘を付くのは止めるっ！」

「俺の大事な妹を狙う輩」、というセリフを聞いたのですが？」

「き、君はなに都合が良い所だけを切り取っているのだっ！」

「フッフ、その言葉は、”貴方がその発言をした事を認めたと同然”ですな」

「た、たわけえーっ！」

藍華は目の前で繰り広げられている戦いコントを眺めていた。

先ほど、自分が一生懸命に探しているのに。何で此处でゆっくりと会話している？

と聞こうとしたがタイミングを失ってしまった。

会話が苦手というのもあるけれど、この二人が放つ固有の空気に近づき難い。

二人ともズルイよ……。

一方同時刻。

歌空中部駅に3人の男女の群れが入った。
たったの3人。何処にでもいる普通の男女。

——あくまで見掛けは、だ。

1人の男は、背が大きい。身長は190cmを軽く超えているだろう。

しかし巨体だが、彼が放つ雰囲気は”優しいモノ”だ。
というのも、何故か常にニコニコ笑っている。
嬉しい事も楽しい事も有った訳でもない。
唯、笑う。それだけ。

一人の女は、巨男の隣を歩く故に小さな身長が更に小さく見える。
身長はざっと、145cm。リアンより5cm低い。
髪の色は”銀”。”白いワンピースに白いパーカー”という格好。
他の二人と比べると、普通に分類される。

そして二人の前を歩く男。

殺気を放ちながら仲間を引き連れて進む。

ガゼと同じ銀色の髪を持ち。

ガゼと同じ蒼い瞳を持つ。

ボタンが開かれた茶色のテールードジャケット。

藍色のジーンズを着込んでいる。

ガゼと同じ髪を持つ狂気に満ちた少年は、口元をニヤリと歪ませ
言う、

「フクククウ……ガゼエ兄さん、殺しィに参りましたア」

少年の名前は、

——ヴォミク・ロベート。

6年前、少年が二人の子供を消した後に。
殺した、実の弟だ。

第09話：過去からの使者 - 挑戦

「お待たせしましたー！」

涙でクシャクシャとなった顔を洗い。

ガゼと藍華と摩の三人が待つ、公園の隅にあるベンチに条一は戻ってきた。

此処まで走ってきたのか、肩で息をしている。

「はあはあ、ふー……師匠！ 準備出来ました」

「では、行きましょうか？」

条一は息を整えつつ、ガゼを見上げた。

待っていました、と言わんばかりにガゼはフツと笑い。周りにいる三人を見渡す。

摩は、ガゼの視線が自分に向けられたのと同時に首を横に振り言う、

「俺は行かんぞ？」

「ええ、分かっていますよ……」

本当は彼らと一緒に摩も行動したかった。

泉条一が、本当に”アイツが認めた人”なのかを自分の目で見極めたい。

けれど、三人はここから超能力ちからの仕事をするのだ。

一般人且つ普通の自分が付いても邪魔になる。

「カス兄……二次元に帰っても、程々に」

「待て、我が藍華。”二次元に帰っても”とはどう言う意味だ！」

「フッフ、流石ですね藍華。私より速く台詞を言うとは」
「お前もか！」

オタク扱いする二人にツツコミを入れる。
と、頭の中のスイッチがオンになったようで……。

「全く君達は揃いも揃って俺をオタク扱いしているが。そもそも私は他の人より少し漫画・ゲーム・アニメが好きただけな人だ。なのに、そのたった少しだけで俺を二次元世界の住人と判断するものではない。次にだ」

「あの……摩？」

「ん、何だ？」

「そろそろ行きたいのですが……」

摩得意の”お話”が始まりそうだったので、ガゼはそれを阻止する。ガゼは着ている白いコートのポケットから取り出した携帯を摩に見せる。正確には携帯の画面内に表示された時間を指を指しながら。

隣で藍華が兄の長話を聞かなくて済むから胸をなで下ろしていた。
「ああそうか。スマンな」

ベンチから立ち上がり、そのまま公園を出る。

「楽しんでこいよ……藍華。そして、泉条」

「バイバイ、摩兄」

「はい！ 思いっきり楽しんでいきます」

摩を背中を眺めつつ、二人は言った。
その時、

——ピップッポー。ピップッポー。ピップッポー。

何処からでも無く発せられた電子音。
否。ガゼの携帯の着音だ。

「おっと、失礼します」

手に持つ携帯の画面を見ると、先ほど別れたばかりの摩の名前が表示されている。通話ボタンを押した。

『ガゼ……あのバ力を見かけたら教える』

「え？」

関口一番に妙な事を言われて、奇妙な声をあげる。

一体なんの事ですか？ と聞き返そうとしたら摩が終話ボタンを押したのか、既に電話は切れていた。

（何故に私に彼の事を……彼と一緒にネットゲームをしている摩の方が詳しいはず。さては……”また何かの事件”に巻き込まれた？）

そこまで思考してから、

（マイナス的な方向に考えるのはよろしうか……今は自分が今すべき事をやる）

ガゼは藍華と条一に視線を移して言う、

「では、今から依頼クエストですよ」

- - - - -

クエスト
—— 依頼。

”超能力”及び”能力者”を管理するギルドと呼ばれる組織から与えられる仕事。

表か裏のみのりの窓口に5円切符を局員に見せながら「困っている」と言つと請けられる。

人々の、想いという名の悩みを解決すればクリア。因みに報酬は”主にお金”。

「まあ、これが我々の依頼です。クエスト
泉条一、何か質問はありますか？」

歌空中部駅で、和歌山県駅行きの電車に乗って15分ほど経った。目的地に着くまでの間、条一はガゼからクエストについて教えて貰っている。

「えーっと、5円切符を見せて困った、ってだけで本当に仕事というか依頼を受けられるのですか？」

出発駅から、歌空東部駅を通過して和歌山市駅に着こうとしている。

依頼時は超能力者専用車両ではなく普通の車両に乗る。

二つだけ例外があるが、それは。

一つ、目的地が裏の駅。

そして、もう一つが……。

「それは次、依頼をする時に貴方自身の目で見て貰いましょうか」「はい」

今回の条一達の依頼内容は、【五日後。】6月6日の土曜日”か

ら”6月21日の日曜日”まで。とある”お屋敷で執事”をやること】。

最初にガゼから内容を聞かされた時は無理だーっと思ったりしたが。藍華に良い所を見せるチャンスだと逆に燃えている。

「さてさて、超能力については……このくらいで。折角ですから、ダブルのラビットを語り合うのは？」

「え……っ？」

心の底から嫌そうな声を上げたのは、条一ではなく藍華だ。

「また……ダブルのラビット？」

藍華は成るべく条一を視野に入れないように、ガゼを見る。

乗客は少なく、窓際のロングシートに三人が並んで座っている。

藍華、ガゼ、そして条一という並び順だ。故にだ。藍華がガゼに視線を向けると、条一が入ってくる。兄の説教が効いたのか、未だに罪悪感を感じているのか。条一を見ることが出来ないでいる。

まあ、その行動は条一から見ればショックなのは言うまでもない。

「ええ。泉条一にあげた帽子は、敢えてダブルのラビットの逆である”緑”を選んだ。何故だか分かりますか？」

「分からなくてもいい」

「フフフ、藍華ご機嫌ナナメですね。では泉条一、答えを」

「うエ？」

いきなり話を振られて奇妙な声を上げてしまった。

というか、条一は”ダブルのラビット”について殆ど何も分らない。知っていることは……20代から30代を中心に大人気な、ウサギの着ぐるみを来たサラリーマンである主人公が活躍するアニ

メ。くらいしか……。

そして、その主人公の口癖が「厳しい現実をプレゼント」ということだ。

「うゝん……」

「フフフ。答えは、私ことガゼは彼には及ばないので”厳しい現実”は渡せない。けれど代わりに”優しい理想”を、ね。という事です」

考えて30秒も経たないうちに答えを言われた。

”厳しい現実”より”優しい理想”の方がいいのでは？ と思ったのは余談だ。

——ピンポンパンポン

電車内に、在り来りな放送音の効果音が流れた。

そして響いた声は、男の低い声、

「フクククウ。デイミングウ」

車内に発せられた一言。たったそれだけだった。

普通の人なら、意味が分からないのでスルーするところだろう。けれど、一言に含まれた”チーム名”。

デイミング……これを知るモノを除いては。

——衝撃——

無理やりかけられたブレーキ。所謂、急ブレーキとなった。突然の出来事に車内にいた人達は転んだりぶつかったりする。そして、電車は何も無い線路の上で、文字通り”止まった”。

「まいどまいどスミマセン……師匠……」
「いえいえ」

他の人達同様に、飛ばされそうになるが、隣で平然と座っているガゼに支えられた。

師匠つて人間？ と疑いたくなる。急ブレーキにより大きく揺れたはずなのに、ガゼはピクリとも動いていない。

超能力者は皆こうなのかな、と思いながらガゼの方をみると、

「！」

ガゼの両肩から、2つの小さな腕が。足先から2つの小さな腕が。青色と銀色の光の粒で構成された、彼の能力である、巨人の腕力グランレブラが床と窓にペタリと張り付いている。

色以外は彼の生身の腕と代わりはない。というのも、腕の幅や長さ、ガゼの普通の腕と同じ。

「いいな……便利だな」
「フフフ」

条一の呟きが聞こえたのか、意地悪そうに笑うと。
シュウン、と煙みたいに能力を消す。

——アレ？ おかしい。

ふと、条一はとある事に気づいた。

ガゼが能力で出した、”青と銀の腕の大きさ”だ。

先ほど裏の駅で見たときは、5メートルは軽く超えていたのに、今の腕は普通の大きさなのだ。

まあ、状況が状況なだけに、ガゼの能力ではなく、今何が起きているのか。それを考えるために思考を現実に戻す。

「一体どうしたんだろう……あの放送と関係あるのかな？」

「ご名答」

「うえ」

条一の台詞に返事を返したのは、ガゼではなく藍華。
さっきまで暗い雰囲気だったけれど、何か今は明るい感じがする。
もしかして今の状況を待っていた？ という事は……、

「あの……もしかして、これは超能力^{あっち}関連？」

「ええ。我々デイミングに宣戦布告した別チームでしょう」

ガゼは言う、

「それにしても電車を無理やり止めるのは流石にやりすぎです」
「宣戦布告？」

条一はガゼの発言に首を傾げる。
そして考える、

——超能力。宣戦布告。チーム。駅内での”喧嘩”。

「も、もしかして……チームで超能力を使って戦うってこと？」

「うん」

「正解」

藍華とガゼが頷く。……藍華のご機嫌が少し治ったのは、”戦えるから？”。

もしそうならば、バトルマニア戦闘狂なのか……。

条一は憧れの先輩に視線を向ける。他者から見れば、無表情なのだけれど条一には分かる。

——彼女が喜んでいる、ということが。

《貴様は本当に、そう思うぬか？》

「！」

——刹那——

声が聞こえた。

心の中に響く声。

《たかが二ヶ月という短い期間だけ遠くから彼女を眺め。微妙な表情ぬ変化から、考えを気持ちを持ちを心情を読み取れると？ バッカじゃなからうか……少しはおかしいと思え》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8813j/>

エキセンへの5円切符～始まりの物語～

2010年10月9日13時33分発行